



撮影場所：報国寺（神奈川県鎌倉市）

無用の用

道

Vol. 13
MICH

徳真会グループ
理事長 松村 博史

「老子」という古典は、今から二千数百年前、百年ほど時間をかけながら、思想を同じくする複数の人々の手を加えて出来上がったものと言われています。

その中に「無用の用」という言葉が出てきます。その言葉のいわれとして次の話があります。石という棟梁が齊の国を旅したときのこと、ある所で巨大な櫟の木が神木として祀られていた。その大きいこと、木陰に何千頭もの牛が憩うこともできる。幹の太さは百抱え、高さは山を見下ろすほどだった。

この大木を一目でも見ようとわざわざやってくる者がひきもきらず、あたりはさながら市場のにぎわいである。

石の弟子たちも息を呑んで見入った。ところが石は目もくれないで通りすぎてしまう。ようやく追いついた弟子たちが、「親方、今までこんな立派な材木を見たことがありません。それなのに目もくれようとされないのはどういうわけですか」と声をかけたところ、「あの木は何の役にも立たない。舟をつくれれば沈んでしまおうし、棺桶を創ればたちまち腐ってしまう。あんなに成長できたのも、もとはと言えば無用だからだ」と答えた。

さすがに棟梁は見るべきところはしっかりと見ていたのだ。

ところが、その棟梁が家に帰ってからのこと、夢に櫟の霊が現れ、

「人も物もみな有用であろうとして命を縮めている。だがわしは違う。今迄一貫して無用であろうとつとめてきて、遂にそうなりきる事が出来た。お前の様に有用であろうと命を縮めている者とはわけが違う

のだ」とやり込められたと言う。考えさせられる話であります。

現代社会は有用性や即効性にばかりに目を向けて、「無用の用」を理解する人は少ないのが現実だと思います。人間も有用性だけを追い求めていると底が浅くなってきます。

有能だけど人間として何か欠けているという人も少なくありません。

また、今は無用でも五年先十年先に有用なものになってくる事も有り、逆に今有用に見えても後になると無用なものになってるものも多くあります。

真の教育も同じ事が言えると思います。組織創りは人づくりと言いますが、人づくりには、膨大な無駄と気の遠くなる様な忍耐力が必要であると、創業以来33年間の人材教育を通して、実感しています。

しかし、その一見無駄に見える努力を継続して初めて、人も組織もひいては国家も、少しずつ出来上がってくるものかもしれません。

現代社会は無理な努力、無駄な努力、無茶苦茶な努力といった愚直な努力を、非効率や時代遅れの様に考えてしまう風潮が有りますが、この老子の「無用の用」の言葉から、我々ほもっと本質を考える訓練をする必要がある様に思います。

徳真会グループ
理事長 松村 博史